

初雪のふる日

安房直子作
寺門孝之絵



秋の終わりの寒い日でした。

村の一本道に、小さな女の子がしゃがんでいました。女の子は、うつむいて地面をながめていました。それから、首をかしげて、ほうっと大きな息をつくど、

「だが、石けりしたんだらう。」

とつぶやきました。その道には、ろうせきでかかれた石けりの輪が、どこまでも続いていたのです。どこまでも、どこまでも、橋をわたって、山の方まで。女の子は立ち上がって、目を真ん丸にして、

「なあんで長い石けり。」

とさげびました。それから、ろうせきの輪の中に、びよんと飛びこんでみました。すると、女の子の体は軽くなって、ゴムまりみたいにはずんできたのです。

かた足、かた足、両足、かた足——。

両手をポケットに入れて、女の子は進んでゆきました。石けりをしながら、女の子は橋をわたりました。キャベツ畑の細い道を通りました。村でたった一軒の、たばこ屋の前を通りました。

10

石けり

地面に丸や四角の図形をかき、その中に小石を投げ入れたり、けつたりして、順に進んでいく遊び。地方により、さまざまな呼び名がある。

ろうせき

ろうのように見える石で作った筆記具のこと。チョークのように使って線をかく。



120

「おや、元気がいいねえ。」

と、店番のおばあさんが言いました。女の子は、あらい息をしながら、とくいそうに笑いました。おかし屋の前では、大きな犬が歯をむき出してほえました。それでも、女の子は進んでゆきました。石けりの輪は、まだまだ続いていたのです。

「こんなに長い石けり、だれがかいたんだらう。」とびながら、女の子は、そればかり考えていました。

バスのていりゆう所の辺りまで来たとき、ほろほろと雪がふり始めました。かわいたこな雪でした。それでも、石けりの輪は終わりません。女の子は、顔を真っ赤にして、あせをびっしりかいて、とんでゆくのです。

かた足、かた足、両足、かた足——。

空はどんよりと暗くなり、風も冷たくなりました。雪は、だんだんはげしくふり始め、女の子の赤いセーターの上に、

10

ほっほっほど、白いもようを付けました。

「ふぶきになるわ。」と、女の子は思いました。

「もう帰ろうかな。」

そうつぶやいたときです。後ろで、こんな声がありました。

「かた足、両足、とんとんとん。」

びっくりして、とびながらふり向くと、真っ白いうさぎが、石けりをしながら女の子の後を追いかけてくるじゃありませんか。

「かた足、両足、とんとんとん——。」

よくよく見ると、その後ろにも白いうさぎ、そのまた後ろにも白いうさぎ——。

ふりしきる雪の中を、もう後から後から、白いうさぎが続いてくるのでした。女の子はびっくりして、目をばちばちさせました。すると、今度は前で声がありました。

10



冷たい

121

「後ろから来るのは白うさぎ、前をゆくのも白うさぎ、かた足、両足、とんとんとん。」

あわてて前を見ると、女の子の前を、やっぱりたくさんうさぎが、一列になってとんでゆくのでした。

「うわあ、ちっとも知らなかった。」

女の子は、ゆめを見ているような気がしました。

「ねえ、どこへ行くの。この石けりの輪、どこまで続いているの。」

すると、前のうさぎがとびながら答えました。

「どこまでも、どこまでも、世界の果てまで。わたしたちみんな、雪をふらせる雪うさぎですからね。」

「ええっ。」

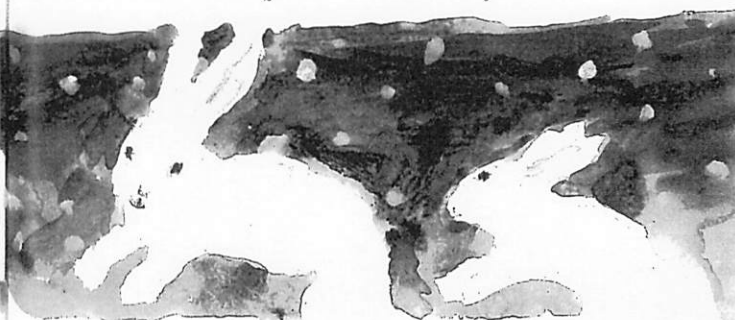
このとき、女の子はどきどきとしました。いつか、おばあさんから聞いた話を思い出したからです。

初雪のふる日には、北の方から、白いうさぎが、どつどつやって来るのだと、おばあさんは言いました。うさぎの群れは、一列になって、山から山へ、村から村へと雪をふらせてゆくのだと。その速いことといたら、もう目が回るくらいで、人の目には、一本の白いすじにしか見えないのだと。

「だから、気をつけなけりゃいけないよ。もしも、そのうさぎの群れにまきこまれたりしたら、もう帰ってこれなくなるとからね。うさぎといっしょに、世界の果てまでとんでいって、最後には、小さい雪のかたまりになってしまふんだから。」

あるとき、女の子は目を大きく見開いて、なんとおそろしい話だろうかと思ったのでした。が、たった今、自分は、そのうさぎにさらわれてゆくところなのでした。

「大変だ。」女の子は止まろうとしました。次の輪の中に、足を入れるのをやめようと思いました。けれどもこのとき、後ろの



うさぎがこう言いました。

「止まっちゃいけない。後がつかえる。かた足、両足、とんとんとん。」

それだけで、女の子の体は、また、ゴムまりみたいにはずみだし、ろうせきの輪のとおりにとんでゆくのでした。とびながら、女の子は、一生けんめいおばあさんの話を思い出しました。あるとき、おばあさんははり仕事の手をちよつと休めて、こんなことを言いました。

「それでも、昔、たった一人だけ、白うさぎにさらわれて、生きて帰れた子どもがいたっけねえ。その子は、一生けんめいおまじないを唱えたのさ。よもぎ、よもぎ、春のよもぎって。よもぎは、まよけの草だからね。」

それなら、わたしもやってみようと、女の子は思いました。女の子は、とびながら、春のよもぎの野原を思いうか

べました。あたたかいお日様と、たんぼの花と、みつばちと、ちようちようのことを考えました。それから、大きく息をついて、

「よもぎ、よもぎ——」。

と言いかけたとき、もううさぎたちは、声をそろえて自分たちの歌を歌いだしたのでした。

ぼくたちみんな雪うさぎ

雪をふらせる雪うさぎ、

うさぎの白は、雪の白

かた足、両足、とんとんとん

女の子は、急いで耳をふさぎました。が、うさぎの歌声はどんどん大きくなり、ふさいだ指のすき間からつむじ風の



ように入りこんできて、女の子は、どうしても、よもぎのおまじないを唱えることができないのでした。

こうして、白うさぎの群れと女の子は、もみの森をぬけ、こおった湖をわたり、これまで一度も来たことのない、遠い所までやって来ました。小さな草屋根がひっそりとならんだ、谷間の村もありました。さざんかのさいた、小さな町もありました。工場のたくさんある、大きな町もありました。けれども、人々はだれも、うさぎの群れと女の子に気づきません。

「ああ、初雪だ。」

とつぶやいて、小走りに通りすぎてゆくだけでした。

女の子は、とびながら、一生けんめいおまじないを唱えようとするのですが、その声は、どうしても、うさぎの歌につりこまれてしまうのでした。

うさぎの白は、雪の白

かた足、両足、とんとんとん

女の子の手足はかじかんで、もう氷のようになりました。

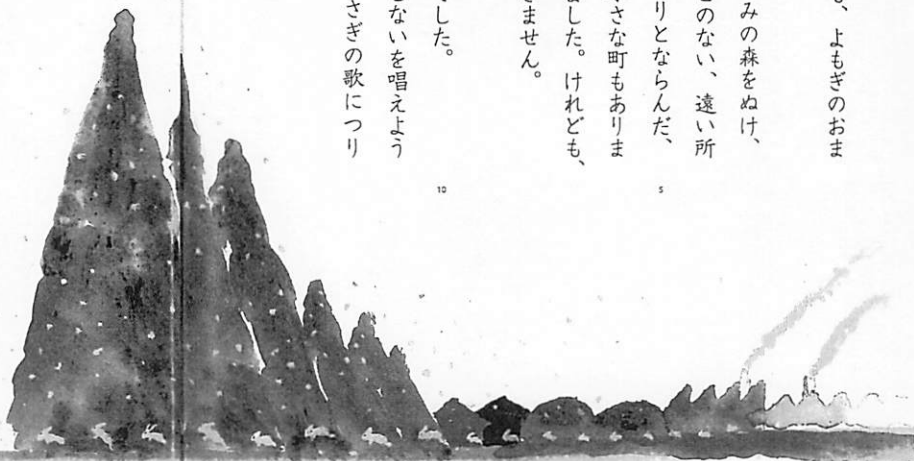
ほほは青ざめ、くちびるはふるえていました。

「おばあちゃん、助けて——」。女の子は、心の中でさげびました。

このときです。たった今かた足を入れた輪の中に、女の子は、一まいの葉を見つけたのです。思わず拾い上げると、それは、よもぎの葉でした。あざやかな緑の、そして、うら側には白い毛のふっくらと付いた、やさしいよもぎの葉でした。

「うわあ、だれが。だれが、落としてくれたの。」女の子は、よもぎの葉を、そっとおねに当ててみました。

すると、女の子は、だれかにはげまされているような気が



10

10

5

してきました。たくさん小さなものたちが、声をそろえて、がんばればれと言っているように思えてきました。

そうです。それは、雪の下にいる、たくさん草の種の声でした。今、土の中でじっと寒さにたえている草の種のいぶきが、一まいの葉を通して、女の子のおねに伝わってきたのでした。

「がんばれ、がんばれ。」

このとき、女の子の頭に、ふっとすてきななぞなぞがかびました。女の子は目をつぶって、大きく息をつく。

「よもぎの葉っぱのうら側は、どうしてもこんなに白いかしら。」とさげびました。

これを聞いて、前のうさぎの足取りがみだれました。前のうさぎは、歌うのをやめてふり向き直りました。

「よもぎの葉っぱのうら側だつて。」

すると、今度は後ろのうさぎが、ちよつとよろけて、

「どうしてもだろうなあ。」

と言いました。うさぎたちの歌声はとぎれて、足取りもおおそくなりました。そこで、女の子は、ひと息に言いました。

「そんなことはかんたんよ。あれは、みんな、うさぎの毛。」

野原でうさぎが転がって、よもぎの葉っぱのうら側に、白い毛がどっさり落ちたのよ。」

これを聞いて、うさぎたちはすっかりよろこんで、
「そうだ、そうだ、それにちがいない。」



10

5

と言いました。そして、こんな歌を歌い始めたのです。

うさぎの白は、春の色

よもぎの葉っぱのうらの色

かた足、両足、とんとんとん



すると、どうでしょう。この歌に合わせてとびながら、女の子は、花のおいをかいだのような気がしました。小鳥の声を聞いたような気がしました。あたたかい春の日をいっぱいに浴びて、よもぎの野原で石けりをしているような気持ちになりました。女の子の体は、だんだん温かくなり、ほほは、ほんのりばら色になりました。女の子は、目をつぶって大きく息をすうと、むちゅうでさけびました。

「よもぎ、よもぎ、春のよもぎ」

気がついたとき、女の子は、たった一人で、知らない町の知らない道をとんでいました。前にも後ろにも、うさぎなんか一びきもいません。ほろほろと雪のまう一本道に、もう石けりの輪はなく、そして、女の子の手の中のよもぎの葉も、消えていました。

「ああ、助かった。」と、女の子は思いました。けれどもこのとき、女の子の足はもうぼうのようて、動きませんでした。

どこからかやって来た見知らぬ女の子を、町の人々が取りかこみました。そして、名前や住所をたずねました。女の子が自分の村の名前を言うと、人々は顔を見合わせて、口々に、とても信じられないと言いました。いくつも山をこえたそんな遠い所から、子どもが歩いてこられるわけがなかったのです。

このとき、一人の年よりが言いました。

「この子は、きっと、白うさぎにさらわれそうになったのだ」と。

女の子は、町の食堂で温かいものを食べさせてもらい、日のないうちに、バスで送り返してもらうことになりました。

